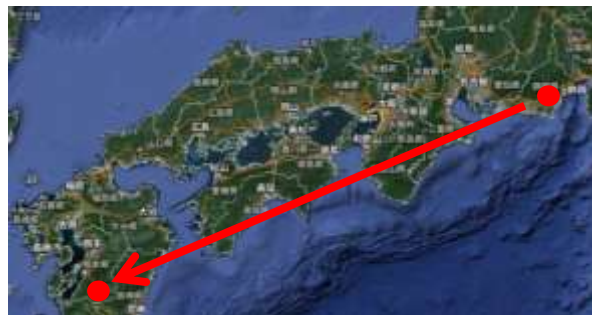


ストーリー ※網掛部分が変更箇所

【相良文化の成り立ちと特徴】

今から800年もの昔、源頼朝の命を受けて、遠江国相良荘（現在の静岡県牧之原市）から相良のお殿様がこの人吉球磨の地に来られました。その後、明治維新を迎えるまで、なんと700年もの長きにわたり、この地を治められたのです。しかし、この偉業を達成するには大変な苦勞がありました。



遠江国相良荘から人吉球磨の地へ

「険しい山々に囲まれた土地であれば、外敵の侵入は防ぐことができる。しかしその地形と球磨川の恵みによって古いにしえから育まれた独自性の強い土地柄、個性の強い民衆の中に入っていくにはどうしたものか・・・。」悩んだお殿様の最初の秘策は・・・「まずは、これまでの伝統文化を認めることから始めよう！」自我の強い民衆の心をつかむため、入国以前の領主に関わる神社仏閣や仏様を残すことにしたのです。心のより所を安堵あんどできた民衆は喜びました。「今度来らしたお殿様は友好的ばい！」民衆の心は少しずつ開き始めます。

そこで次の秘策です。「民衆の娯楽を認めてあげよう」貴重品である米を原料とする米焼酎の醸造を認め、またそれに伴う球磨拳けんやウンスンカルタなどの余興も大目にみました。民衆の暮らしも徐々に良くなり、藩の財政も立て直していきます。民衆の心はグッとお殿様に傾いていき・・・



焼酎を飲みながら球磨拳に興じる様子

「さすがおどんたちの殿さんは違うばい。よかよか、どこまでもついて行くばい！」

ここまでくればしめたもの。相良のお殿様に対する忠誠心と自負心が芽生え、お殿様の庇護ひごのもと領民は伸び伸びと豊かな生活を営み、庚申信仰こうしんや三十三観音などの民間信仰も受け継がれるようになりました。お殿様はこれまで倒してきた人々の荒ぶる魂を鎮め、神様としてまつり、永久に平和な統治が続くよう、最先端の技術・文化を取り込み、領内にどこか都ぶかやぶさりな茅葺の社寺を造り、自ら祭や儀式も執り行いました。民衆は自分たちの土地にみごとな建物が建ったのを誇らしく思い、「お殿様、ここの管理は我々に任せてください！」こうして社寺の維持管理も地域に根付いていきました。

相良氏が滅ぼした平川氏を祀る
山田大王神社（山江村）

相良文化の特徴は、このように領主と民衆が一体となって形成され継承されたところにあります。相良のお殿様による秘策は、この地を治めるための必須条件でもあり、その後も歴代当主が継承し続けました。領民の信仰や思いに配慮配慮しなければ、お殿様の地位も危ういものになるのです。

【現代に息づく相良文化】

こうして形成された相良700年の領民の意識は、お殿様がなくなった現代にも脈々と受け継がれています。民衆が代々地域で信仰や儀礼を守り続けた結果、球磨神楽やおくunchi祭りが盛んに行われ、今日では各地で姿を消した茅葺の建造物も、この地ではごく当たり前の光景として至るところで目にすることができます。相良氏により寄進されたり、あるいは相良氏入国以前から守られた、この地域に数多く残る古仏についても、往時のままの姿を拝むことができ、あたかも時間が止まったかのように感じられます。また、球磨川沿いに立ち並ぶ風情ある温泉旅館から、相良氏の居城 人吉城が見え、その石垣に往時の相良氏覇権の情景を重ねることができます。さらに、数百年の歴史を誇る世界ブランドの球磨焼酎は、過去と現在をつなぐ共通の味わいを感じさせ、現在、地元では“球磨の焼酎学校”など、焼酎文化を次世代に伝える取り組みが行われています。また、宴会の余興として歌われてきた民謡では、球磨の民謡の継承と普及を目的にした“全国選手権大会”が開催され、全国の“のど自慢”が競い合います。ウンスンカルタでは、保存会が毎年“全国大会”を開催、球磨拳では、多良木町が“世界大会”を開催し、いずれの大会も子供から大人まで出場して大きな盛り上がりを見せてます。相良三十三観音めぐりは、春秋のお彼岸に行われる「御開帳」を目当てに札所をめぐる大勢の人たちで賑わい、地域の方々の温かい「お接待」も相まって、身も心も清められ癒されます。



相良のお殿様と民衆によって創り上げられた人吉球磨の歴史遺産の特徴は、領主から民衆までが一体となったまちづくりの精神を基に、社寺や仏像群、神楽等をともに信仰し、楽しみ、守る“保守”の文化、したたかに外来の文化を積極的かつ大胆に吸収した“進取”の文化、さらに、その二つの文化がさらなる昇華を遂げかたちづくられたものであることです。

肥薩線などの近代文明が到来した明治時代、相良氏700年の統治には終止符が打たれますが、相良氏と領民による文化とそれがもたらした歴史遺産は、現代の人吉球磨に生きる私たちの日常生活と深く関わっており、いわば“生きた歴史遺産”といえるのです。

このような独特な文化の形態は、まさに人吉球磨でしか見ることができず、昭和を代表する歴史小説家である司馬遼太郎は、その著書『街道をゆく』の中で、人吉球磨の地を「日本でもっとも豊かな隠れ里」と絶賛しています。